

Kwansei Gakuin University Research Center for Christianity and Culture

# RCC Newsletter

発行：関西学院大学 キリスト教と文化研究センター

http://www.kwansei.ac.jp/c\_rcc/ TEL:0798-54-6019

## 研究プロジェクト報告

### 研究プロジェクト

### ポップカルチャーとキリスト教

RCC 主任研究員 打樋 啓史

今年度で二年目となる本研究プロジェクトは、映画、音楽、漫画など様々な形態をもつ現代のポップカルチャーの中で、キリスト教、またキリスト教に関わる主題や事象がどのように取り上げられ、描かれているかを考察することを通して、今日の文化と社会におけるキリスト教の位置をより明確にすることを目指してその活動を続けてきました。今年度は、計四回の研究会が開催され、各研究メンバーからの研究成果報告を積み重ねていくことができ、毎回充実した内容での発表がなされ、それを受けて活発な議論が行われました。春学期に開かれた三回の研究会（RCC ニューズレター第三三号で報告済）に引き続き、秋学期に

は一〇月一九日（金）に第七回研究会が開催され、岩野祐介神学部教授より、「一九六〇年代後半アメリカのジーザス・ミュージックに関するイントロダクション」と題して研究報告が行われました。日本ではあまり知られていないこのジャンルの音楽について、参加者は実際に楽曲を鑑賞しながらアメリカにおけるキリスト教の一面についての理解を深め、有意義な意見交換を行なうことができました。なお、本プロジェクトでは、一月二八日（月）に第八回の研究会が予定されており、これが二年間にわたる活動としては最後のものとなります。以下は、岩野氏ご自身による第七回研究会での研究報告の要約です。

## 一九六〇年代後半アメリカのジーザス・ミュージックに関するイントロダクション

RCC 研究員 岩野 祐介



ジーザス・ミュージック（ジーザス・ロック）とは、ジーザス・ムーヴメントを背景にあらわれてきたキリスト教音楽の一種である。

ジーザス・ムーブメント (Jesus Movement) とは、一九六〇年代後半、アメリカ合衆国の主に青年の間に起ったカウンターカルチャー運動の一つである。教会のキリスト教を嫌い、イエスのみを模範とする信仰を求める運動であり、また反戦・平和、社会正義の追求、愛のわざの実践などを強調した。この、ジーザス・ムーブメントに関わった人々はジーザス・ピープル、ジーザス・フリークなどと呼ばれたが、その人々の、当時としては同代的なキリスト教の音楽表現が、ジーザス・

ミュージックあるいはジーザス・ロックなのである。既成の教会の礼拝や音楽を古臭い、権威的なものだと感じた若者が、率直な音楽として表現したものであり、「イエスを信じればすべて解決する」といった素朴で明解なメッセージを持つことが多い。

ジーザス・ミュージックは現代アメリカの Contemporary Christian Music のルーツとみなすことができる。とはいえ、ある種のスタイルが確立され、産業化されている現代の CCM と比較すると、ジーザス・ミュージックを演奏するミュージシャンの多くは地域性が強く、レコードを自主製作し、また地元のコラブや、特徴的なものとしてはキリスト教組織が運営するコーヒールハウスなどを活動拠点としていた。

日本にも一部にはジーザス・ミュージックのレコード・CD のコレクターがいるが、その支持

は「カルト的」なものにとどまっている。本発表では「Agape（カリフォルニア州ハンティントン・ビーチ）の「Gospel Hard Rock」、Azibus（カリフォルニア州）の「Help」、Earthen Vessel（ミネソタ州ランシング）の「Everlasting Life」、The Search Party（カリフォルニア州）の「Montgomery Chapel」、Wilson McKinley（ワ

シントン州スポケーン）の「Spirit of Elijah」より、実際に楽曲を一曲ずつ鑑賞し、アメリカ合衆国のキリスト教のあり方と絡めて、意見・感想を分かち合うことができた。なお上述のグループのなかでは、「The Search Party」のみカトリック系、他はプロテスタント系のキリスト教組織・団体と関係があったと思われる。

## ■研究プロジェクト

### シンポジウム

### 「キリスト教主義学校における平和教育のあり方をめぐって」報告

RCC センター副長 村瀬 義史



研究プロジェクト「キリスト教主義教育の展開」では、二〇一八年一月一二日（金）に関西学院吉岡記念館会議室においてシンポジウムを実施しました。福島旭氏（関西学院中

学部宗教主事）を基調報告者に迎え、二〇一七年度より進めてきた本プロジェクトのこれまでの共同研究をふりかえりながら、テーマをめぐる論点を整理し、

討議を行いました。

福島氏の研究報告、「関西学院 中学部聖書科における平和教育―教科化される『道徳』との比較を通して―」は、「道徳」教科化の歴史的動向や学習指導要領、検定教科書等に関する緻密な分析に基づいてキリスト教主義教育の固有の平和教育のあり方を探る、実に刺激的な内容でした。

まず、関西学院中学部では、聖書科だけでなく他の教科や礼拝、修学旅行などの多様な形で「平和教育」が展開されているとの前置きの後、聖書科における実践の現状が紹介されました。中学生には政治的な事柄として

のみ認識されがちな「平和」を、一人ひとりに迫る身近な事柄として考える手法として、「平和」を、社会的な生を含む「いのち」や身近な人間関係の課題（いじめ、友人・家族との関係など）を結びつけて扱い、アンケートやワークシートなどを駆使して生徒の声を聴きながら授業を展開されているとのことでした。

同時に、福島氏は、教科化される「道徳教育」に関わる「学習指導要領」や数々の検定教科書などの内容を精査し、それとの対話の中でキリスト教主義に立つ授業のあり方の独自性を探ってこられました。今回の報告は特にこの点を巡るものでした。

二〇一八年度から公立小学校で、二〇一九年度から公立中学校で科目としての道徳が全面实施されます。これまで教科の位置になかった道徳が「教科化」される、しかも「特別の教科」として全教育活動に浸透する形へと格上げされることにより、これまで「道徳」を、「宗教」「聖書」といった科目に代替して実施してきたキ

リスト教主義学校には何が求められるようになるのか。「特別の教科」たる道徳の代替科目になりうる、しかし明確な独自性を保持した宗教科なり聖書科のあり方について考察されました。

福島氏によれば、「道徳」の目指すところと聖書科の目指すところには、いくつもの共通点があるものの、明確な違いも散見されます。たとえば、理想とされる人間像について、「生きる力を育む教育」を前面に打ち出す道徳においては、いじめられないような「強さ」、いじめられなくても立ち向かう「強さ」を身につけることに重点があり、一方で、キリスト教主義教育においては、弱い状態にある存在へのまなざし、いじめをゆるさない姿勢を大切に扱うということですね。また、道徳の教科書において、理想像として著名なスポーツ選手や平和に貢献した偉人たちが次々と登場しますが、平和を壊してきたのも人間であること、人間の失敗の姿、罪深く、愚かな姿については十分に扱われないことに関連して、人間の光だけなく闇についても正面から向き合う聖書のアプローチとは異なることが論じられました。

キリスト教主義教育の独自性について考える上で、道徳の「学習指導要領」で新たに強調される



るようになった「崇高なもののかかわり」という項目をどう考え、どうこれと対峙、対話してゆくかが重要になってくるとの指摘もありました。

締めくくりに、福島氏は、キリスト教主義学校の教育的使命はそれ自体、広義の平和教育そのものであることを示唆されました。そして、他の様々な「平和教育」を否定するものではないが、キリスト教主義学校としての独自の「平和教育」があり、その探究と遂行が、今後の日本においてますます必要とされることを強調されました。

基調報告に続く質疑応答、その後の総合討論は大変活気あるものでした。総合討論において



写真 1



写真 2

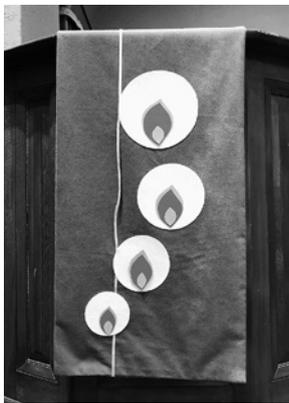


写真 3



写真 4

以前、このRCCニュースレターで連載しており、皆さまからご好評をいただいていた「関西学院のキリスト教シンボル」を、今号から再開することになりました。私たちのキャンパスには、実は、いろいろなところに、キリスト教のシンボルが掲げられています。普段はあまり意識されていないかも知れないシン

ボルを、ご紹介していきます。再開第一回は、「典礼布」を取り上げます。キリスト教には、一年を通して礼拝を計画するためのカレンダー、「教会暦」（「典礼暦年」とも言う）があります。大まかには、イースター、ペンテコステ、クリスマスなどの日を中心に、その準備期間と、その後の期間

とで成り立っています。そして、次のような色が、それぞれの意味合いをもって決められています。

- ◆ 白 喜び、感謝、復活—イースター、クリスマス、公現日（一月六日）、洗足木曜日
- ◆ 赤 聖霊、愛、血—ペンテコステ、受難日（聖金曜日）、しゅろの主日
- ◆ 紫 悔い改め—レント（イースターの準備期間、日曜日を除く四〇日間）、アドヴェント（クリスマス準備期間、四週間）
- ◆ 緑 平和、成長—上記の期間以外

※カトリック教会などでは、この他に、イエスやマリアの祝日に、聖人の日、教会の儀式などに、どの色を用いるか、細かい決まりがあります。牧師・神父の式服や、礼拝堂に用いる飾りの布（「典礼布」）などは、この色に基づいて、制作されます。

神学部チャペルでは、この典礼布を、説教壇に掛けて、教会暦を感じられるようにしています。その中で、神学部オリジナルのものを紹介します。

写真1・2は、緑のもので、秋学期の間、アドヴェントに入るまで使われています。ベトナムで織られた布をフェアトレードで購入しました。ノアの箱舟の物語を基に、織の模様を虹に見立てて、オリブの若木（聖書朗読台用）と、そこから枝をくわえて帰って来た鳩（説教壇用）をデザインしています。平和と成長を象徴する意匠になっています。布の下が斜めになっています。動きがあるのが特徴です。二〇〇四年に、当時の大学院生たちがデザインを考えて、制作してくれました。

写真3・4は、クリスマスの準備期間であるアドヴェントのためのものです（色は紫）。この期間は、日曜日ごとに、一本ずつロウソクを灯して—第一日曜日是一本、第二日曜日は二本と—というように—クリスマス待ち望みます。四本ロウソクが灯されると、その週のうちにクリスマスとなりませう。説教壇用のものに、四つのもしびが描かれているのは、このことを表しています。聖書朗読台用のものには、一つだけ灯りが灯されていますが、これは、聖書が「道の光」（詩編一一九編一〇五節）であり、希望の源であることを表しています。これも、二〇〇六年に大学院生たちのデザインで制作されました。

チャペルアワーは学部ごとに開かれています。どの学部のチャペルにも出席することができます。もちろん、神学部のチャペルにも出席することができます。一度、典礼布を見に、神学部チャペルアワーに出てみられたいかがでしょうか。

## キャンパスの中のキリスト教シンボル（その11）

RCC センター長 水野 隆一

は、これまでの研究会で報告された、奥本京子氏（大阪女学院大学）、野島大輔氏（関西学院千里国際中高）、望月康恵氏（本学法学部）、澤村雅史氏（広島女学院大学）から、それぞれの報告内容をふりかえって頂きながら、平和をつくり出す人を育むキリスト教主義教育のあり方について意見を交わしました。本稿では福島氏の報告を中心にまとめましたが、今回のシンポジウムの内容は本センターの紀要に収録し、広く学内外の皆さんに分かち合いたいと思います。ぜひご一読ください。

## 映画とキリスト教 (2)

『エバン・オールマイティ』(二〇〇七、アメリカへ日本未公開)

RCC 研究員 平林 孝裕

ステイヴ・カレルという俳優をご存知だろうか。『フォックスキャッチャー』(二〇一四)のデューポン役を思い浮かべる人も多いかもしれない。狂気を見せるその演技は、米国アカデミー賞、ゴールデングローブ賞

にハチャメチャな物語が展開する。前作でニュースショーのアンカーであったエバンは米国下院選挙に立候補。そして「世界を変える」を公約に掲げて、見事当選を果たした。さて、どのように世界を変えるのか。

での主演男優賞ノミネートに結びついた。はじめてその名を知ったのは、『ゲットスマート』(二〇〇八)のスパイ志望の分析官(分析官としては優秀だが、エージェント向きでない)役としてである。クールなアン・ハサウェイとのかけあいは秀逸ですっかり彼のファンとなった。

エバン一家はヴァージニアの一戸建てに引っ越し、新生活を始める。その夜、息子のライアン、妻のジョーンが祈ったことに触発され、エバンもひそかに「世界が変わえられる」よう神に

「世界が変わえられる」よう神に助けを祈った。すると翌朝から不思議な出来事が次々に起こる。目覚時計が鳴る。「六時一四分」……七時にセットしたはずなのに。今度は玄関に「アルファ・アンド・オメガ設備」から古めかしい木槌などの工具一式が届く。箱の届先に「オーウッド・ローン六一四番地」(実際は四一六番地)。翌朝六時一四分、今度は大量の木材が届く。送状には「一八〇〇—GO—WOOD

の洪水、ひとつがいごとにエバンへと殺到する生き物たち……、執拗な神からの働きかけにエバンはしぶしぶ箱舟作りに同意する。神は言う、おまえは「世界を変えたい」と祈った、それを実現するための一歩が箱舟作りなのだ、と。手渡されたのは『アホでも作れる箱舟』(Ark Building for Dummies)の一冊。ついに箱舟作りに着手したエバンの姿は、いつしかノアさながらにかわっ

ていく。次々に起こる夫の異変に、とりみだしていく妻ジョーン、そして家族の絆も風前の灯火に。「ニューヨークのノア」と周囲に揶揄されながらも、家族……と動物たちの協力で箱舟の完成をみる。洪水がやってくると予言されたその日、実際に洪水は起こるのか。これ以上はネタバレになるので、実際に視聴してほしいと願う。

ざんねんなことに本編は日本未公開であった。現在は、DVDなどで視聴することが可能であるが、全米公開時、週末興行成績初登場一位(映画.com)となつたにもかかわらず、劇場公開が見送られたのは日米の文化的な差違によるところが大きい。

「六一四」をはじめ聖書やキリスト教伝統の参照やあてこすり

が本作にはテンコ盛である。それを探すだけでも楽しいのだが、何も知らなければ面白味も半減しよう。日本の某携帯電話会社のCMに三太郎が登場するように、説明不要、聖書やキリスト教が当たり前前の地域でこそその映画なのである。翻ってみれば、米国では聖書やキリスト教の知識を観客に期待した映画作りがなされて

いるということである。シャドヤック監督は、撮影のために聖書の記述通り、全長一三七メートルになる箱舟を本当に建設した。さらに当時、史上最高の七五種、二〇〇匹の動物を動員した結果、制作費は一億七五〇〇万ドル(当時の換算で約二二三億円)にのぼった。すばらしい贈物、「神の創造」、地球の保護をメッセージとしていると監督はインタビューに答えている。

箱舟作りに深いりする夫の異変に当惑し、実家に帰ろうとする妻ジョーンに、ウェイターの姿(名札に「AL MIGHTY」とある)で現れた神は、新生活をはじめた時、「家族の絆を……と祈ったではないかと問いかける。さらに、そう祈ったからといって、神はそのまま(「家族の)和やかな温もり」を与えるだろうか、それとも家族が愛し合う「機会」を与えるだろうかと諭す。

映画の枠組として聖書物語を採るだけでなく、本当の「祈り」とは何か、世界のため、人のため私たちは、何ができるのか語ることにしても本作はすぐれて「キリスト教」的映画だといえる。お薦めの一編である。

本作はジム・キャリー主演『ブルース・オールマイティ』(二〇〇三)のスピノフ作品として制作された。ブルースの敵役エバン・バクスターを主人公

として制作された。ブルースの敵役エバン・バクスターを主人公

として制作された。ブルースの敵役エバン・バクスターを主人公

として制作された。ブルースの敵役エバン・バクスターを主人公

として制作された。ブルースの敵役エバン・バクスターを主人公

として制作された。ブルースの敵役エバン・バクスターを主人公

として制作された。ブルースの敵役エバン・バクスターを主人公

として制作された。ブルースの敵役エバン・バクスターを主人公

として制作された。ブルースの敵役エバン・バクスターを主人公

として制作された。ブルースの敵役エバン・バクスターを主人公